

Cleopatra's Dream <div>クレオパトラの夢</div>
David Hazeltine Trio <div>デヴィッド・ヘイゼルタイン・トリオ</div>
1. クレオパトラの夢 <div>Cleopatra's Dream 〈 B. Powell 〉 (5:14)</div>
2. テンバス・フュージット <div>Tempus Fugit 〈 B. Powell 〉 (3:06)</div>
3. グラス・エンクロージャー <div>Glass Enclosure 〈 B. Powell 〉 (3:43)</div>
4. ウェイル <div>Wail 〈 B. Powell 〉 (5:21)</div>
5. バウンシング・ウイズ・バド <div>Bouncing With Bud 〈 B. Powell 〉 (6:50)</div>
6. ダンスランド <div>Danceland 〈 B. Powell 〉 (6:24)</div>
7. ストリクトリー・コンフィデンシャル <div>Strictly Confidential 〈 B. Powell 〉 (5:54)</div>
8. 異教徒の踊り <div>Dance Of Infidels 〈 B. Powell 〉 (4:47)</div>
9. アイル・キープ・ラヴィング・ユー <div>I'll Keep Loving You 〈 B. Powell 〉 (7:31)</div>
10. ジス・ワンズ・フォー・バド <div>This One's For Bud 〈 D. Hazeltine 〉 (7:08)</div>

デヴィッド・ヘイゼルタイン David Hazeltine 〈piano〉
ジョージ・ムラツ George Mraz 〈bass〉
ビリー・ドラモンド Billy Drummond 〈drums〉

録音：2005年6月24、25日　ザ・スタジオ、ニューヨーク
*

Produced by Tetsuo Hara & Todd Barkan.
Recorded at The Studio in New York on June 24 and 25, 2005.
Engineered by Katharine Miller.
Mixed and Mastered by Venus 24bit Hyper Magnum Sound：Shuji Kitamura and Tetsuo Hara.
Front Cover Photo：(C) Jan Saudek / Art Unlimited , Amsterdam / © G.I.P. Tokyo. Designed by Taz.

バド・パウエルの「ザ・シーン・チェンジズ」(ブルーノート、1958年12月録音)で初演された人気の高いオリジナル。秋吉敏子、ケニー・ドリュエーらも吹き込んでいる。ヘイゼルタインのトリオはラテン調のリズムを導入した斬新なアレンジで聴かせる。ピアノ・ソロに続くムラーツのベース・ソロも聴きものだ。

2) テンバス・フュージット

曲名はラテン語の格言で<光陰矢の如し>(Time Flies)と訳される。パウエルがレイ・ブラウン(b)、マックス・ローチ(ds)からなるトリオで1949年初頭に録音したアルバム「ジャズ・ジャイアント」(ヴァーヴ)で初演された。この曲を得意としている秋吉敏子はライブなどでは毎回曲名通りスピード感に溢れる演奏に挑戦しているが、ヘイゼルタイン・トリオのこの演奏は、パウエルのオリジナル演奏よりテンポを少し落としてミッド・ファーストで演奏される。それが結果としてスイング感を一層強調することになったのは秀逸なアイデアで大成功といえるだろう。

3) グラス・エンクロージャー

「ジ・アメイジング・バド・パウエルVol.2」(1953録音)に初演が聴かれる。<ウン・ボコ・ロコ>とともにパウエルの作曲面での最高傑作とされるこの曲をヘイゼルタインのトリオは中間にベース・ソロを配して、より完成された演奏へと発展させている。是非、オリジナル演奏と聞き比べてほしい。

4) ウェイル

パウエルがファッツ・ナヴァロ(tp)、ソニー・ロリンズ(ts)を加えたクインテットで1949年にブルーノートに録音した初演は「ジ・アメイジング・バド・パウエルVol.1」に収められている。ジョージ・シアリング(1992年) ジャッキー・テラソン(1993年)、フランク・アヴィタビレ(1998年)らの録音がこれまでに残されている。ヘイゼルタインのこの演奏はまるでバド・パウエルのスピリットが乗り移ったかのようなパシオネートな演奏で、聴いていて胸が熱くなる。後半ではドラモンドの見事なドラム・ソロがフィチャーされる。

5) バウンシング・ウイズ・バド

デヴィッド・ヘイゼルタインはいまニューヨークのジャズ界で引っ張りだこのピアニストだ。私が最近彼の演奏に接したのは、6月にニューヨークに滞在していた時、「ディジーズ・クラブ・コココーラ」にイタリアが生んだアルト・サクスの神童フランチェスコ・カフィーソを聴きに出向いた時だった。カフィーソのサポート役になり出されたのがヘイゼルタインで、このときはベースがデヴィッド・ウィリアムス、ドラムスがジョー・ファーンズワースだった。

その前後、彼のスケジュールがどんな具合だったのかをインターネットのホームページで調べると、6月の19日にはテナー・サクスのエリック・アレキサンダーとともにジャマイカのジャズ・フェスティバルに出演しているし、7月の前半はカーティス・フラー・セクステットでヨーロッパにツアーし、ノース・シー・ジャズ・フェスティバルやイタリアで演奏している。後半になるとこんどはエリック・アレキサンダー・クインテットでフィンランドのポリ・ジャズ・フェスティバルに出演、米本国に帰国した直後の7月27日にはニューヨークで「ホレス・シルバーの音楽」と題するコンサートに自己のクインテットで出演している。そして8月はジョージ・ムラーツ(ベース)、ピリー・ドラモンド(ドラムス)とのトリオで、マンハッタンの人気クラブ「スモーク」に出演したり、ジョン・ファディス・クインテットでニューポート・ジャズ・フェスティバル(ロードアイランド州)に出たり、ルー・タバキンのカルテットでロチェスターの大学キャンパスでワークショップを担当したりという、まことに多彩な活躍ぶりである。そして9月にはアルト・サクスのジム・スナイデロのカルテットで来日、10月には再び歌手のマレーナ・ショウとともに来日と日本ツアーが連続する予定だ。

デヴィッド・ヘイゼルタインは日本のヴィーナス・レコードからビル・エヴァンスの曲を中心にした「ワルツ・フォー・デビー」(1998年録音)、ホレス・シルバーの曲を採り上げた「セニョール・ブルース」(2000年録音)などすでに4枚のアルバムをリリースしているし、海外のレーベルからも10枚近いリーダー作を発表しているので、彼の名前はもうかなり知られているはずだ。ただジャズ・ピアノの世界は優れたプレイヤーが自白押しだし、第1線に浮上してからも、そこからひときわ輝く世界に飛び抜けるのは容易なことではない。ヘイゼルタインは1958年10月27日、ウィスコンシン州ミルウォーキーの生まれですでに47歳になる。1992年にニューヨークに進出するまでに、彼の場合は、故郷のミルウォーキーでソニー・スティットやチャェット・ベイカーらと共演するなどかなりの経験を重ねている。このほかジョン・ヘンドリックスの伴奏グループに加わったり、ジュニア・クックやブライアン・リンチのグループ、ジョン・ファディスが指揮したカーネギー・ホール・ジャズ・バンドなどでレギュラーとして活動した経験もある。このあとヘイゼルタインに必要なことは、ブレイクのきっかけともなる決定盤の登場だが、ここに誕生した「クレオパトラの夢/デヴィッド・ヘイゼルタイン・トリオ」が待望の決定打となる可能性はきわめて高い。

今年の6月にフランチェスコ・カフィーソのライブを聴いた時、たまたま同席することになったヴィーナス・レコードの原プロデューサーに向かって、私が「ヘイゼルタインのピアノがいいですね」という感想を漏らしたところ、「じつは、近く彼のバド・パウエル曲集をつくることになったんです。なかなかOKしてくれなかったんですが、ようやくやろうといってくれました」と嬉しそうに話したのを思い出す。じつは、滴を持って録音されたその成果が、このアルバムというわけなのである。バド・パウエルはこれまでヘイゼルタインにとってはもっとも大きなインスピレーションとなってきた“ジャズ・ピアノの神様”。30年近くにわたって培ってきた豊富な経験とバド・パウエルへの変わらぬ憧憬をもとに、ヘイゼルタインはここにひときわ輝く成果を記録したといっていい。共演しているトリオのメンバーは、ヘイゼルタインがつい先頃も「スモーク」で演奏した時と同じ顔ぶれだし、トリオの息はびたりと合っている。それでは早速演奏を聴いていくことにしよう。

1)クレオパトラの夢

バド・パウエルの傑作のひとつ。1946年にソニー・スティットのサヴォイ・セッション(バド・パウエルも参加)で初演された時は<ピバップ・イン・パステル>というタイトルで吹き込まれた。その後1949年にパウエル名義でブルーノートに吹き込まれた際に<バウンシング・ウイズ・バド>となった。ハンク・モブレイ(1956年)、アート・ブレイキー(1959年)、トミー・フラナガン(1977年)、マッコイ・タイナー(1991年)ほか多くのミュージシャンによる吹き込みが残されている。ヘイゼルタイン・トリオの演奏は編曲に工夫をこらしている。テーマの導入部でベースとピアノが応答形式で主題を導き出すという場面もフレッシュだし、ピアノ・ソロ(全3コーラス)の第1コーラスではベースが2ビートでサポート(ブリッジで4ビートの転じる)、続く第2、3コーラスで4ビートに転じてダイナミックにスイング感を盛り上げる。心憎い演出だ。ムラーツの2コーラスのベース・ソロから最後はピアノとドラムスの4小節の交換でテーマに戻る。

6) ダンスランド

<クレオパトラの夢>と同じ「ザ・シーン・チェンジズ」で発表されたパウエルのオリジナル。シンプルで弾むようなメロディで書かれたダンサブルな曲調からこのタイトルが付けられた。ヘイゼルタインによるこの演奏はなんと記念されるべき最初のカバーである。ヘイゼルタインは原メロディをハーモニックに発展させて意表をついてみせる。最初にソロをとるムラーツは原メロディを随所に引用しながら豪快にアドリブを構築している。このあとピアノとドラムス(ブラシ)による掛け合いを経てピアノ・ソロになる。この場面で、ドラムスがブラシからスティックに持ち替えてトリオのスイングに活力をもたらす。ここでのピアノ・ソロは本アルバム中の圧巻のひとつといっていいだろう。

7) ストリクトリー・コンフィデンシャル

<テンバス・フュージット>を生んだ1949年のトリオ・セッション(「ジャズ・ジャイアント」に収録)で初演された。ケニー・バレル(1957年)、アル・ヘイグ(1977年)、トミー・フラナガン(1977年)らが吹き込んでいる。ヘイゼルタインのトリオはオリジナル演奏とほぼ同じテンポで、スインギーな演奏を聴かせる。

8) 異教徒の踊り

ブルーノート盤「ジ・アメイジング・バド・パウエルVol.1」に初演が聴かれる。チャーリー・パーカーをはじめアート・ブレイキー&ジャズ・メッセンジャーズ、チャーリー・ヘイデン(1991年)らの演奏に加えてパウエル自身の再演も数多く残されている。ヘイゼルタイン・トリオはオリジナル演奏よりややテンポを早めて躍動的なプレイを聴かせる。ヘイゼルタインのピアノ・タッチは1960年代初頭のパウエルの好調期を彷彿とさせる。ピアノに続いてムラーツのベース・ソロ、ピアノとドラムスの掛け合いが登場する。

9) アイル・キープ・ラヴィング・ユー

ティン・パン・アレイの曲のようなタイトルが付けられているが、れっきとしたバド・パウエルのオリジナルで、パウエルはソロ・ピアノで「ジャズ・ジャイアント」(ヴァーヴ)で初演している。パウエルの作品中ではもっとも多くのカバー・ヴァージョンが残されている曲のひとつで、ジャッキー・マクリーン(1962年)、トミー・フラナガン(1986年)、パリー・ハリス(1990年)、秋吉敏子(1990年)ほかの吹き込みがある。ヘイゼルタイン・トリオは哀愁に満ちた原曲の持ち味を見事に再現してみせる。

10) ジス・ワンズ・フォー・バド

このアルバムのためにヘイゼルタインが作曲したバド・パウエルへのオマージュ。パウエルのピアノ芸術の深奥に迫る息詰まるようなピアノ・ソロが展開される。ムラーツのベース・ソロも、ドラムスとピアノの交換、ドラムスによるソロ、ラストを飾るにふさわしいトリオの華やかなフィナーレが聴かれる。

児山紀芳 (Koyama Kiyoshi) 2005年9月